

ピッツバーグ大学での JAL 出張セミナー開講の試み

谷口 英理*

国立新美術館の美術資料室の谷口と申します。私からは、JAL2016の一環として2016年10月17日にアメリカのピッツバーグ大学で実施した出張セミナーの概要と、そこで得た成果・課題を、報告させていただきます。【スライド1】

はじめに—JAL 出張セミナーの目的

今回の出張セミナーは、あくまでもケース・スタディとしての小規模な試みでした。では、何を目的としたケース・スタディなのか。

まず前提として、JAL プロジェクトとは、海外の日本美術資料専門の司書あるいは研究者を日本に招聘して、国内の関係諸機関において10日前後の研修ならびに交流事業を行うというコンセプトのプロジェクトです。つまり、「海外から日本に来てもらう」プログラムであり、また、事前準備として主宰者である水谷長志氏が研修者の元に赴いてヒアリングなどを行うという仕組となっています。

ところがJAL2014、2015の後に「日本から海外に行く」流れ、つまり、JALプロジェクト実行委員会の委員が海外でセミナーを実施したり、また、実行委員が海外の日本関係の図書館を視察・現状を把握したり等々といったことも必要なのではないかという意見が、研修生および実行委員自身からも提出されました。しかし、JAL プロジェクトは文化庁の助成を受けた継続プロジェクトであることもあり、枠組み自体を大幅に変えることは難しいという事情がありましたので、今年度、小規模な出張セミナーを実験的に行ってみようということになったのです。JAL2016の参加者でもあり、日本研究が盛んなピッツバーグ大学のグッド長橋広行氏のご協力が得られたため、同氏の元に事前ヒアリングに伺う際に、同大学博士課程の大学院生を対象とした出張セミナーを行うことにしました。

以上のように、出張セミナーの第1の目的は、JAL2014、2015で出された意見に対する回答としてのケース・スタディを行うということでした。また、第2に、ポストJALプロジェクトの視座を模索する意味合いもあったと思います。今年で一旦区切りを迎えるJALプロジェクトですが、

このタイミングで今後の新しい展開を考えておきたいということです。【スライド2】

ピッツバーグにて—視察とセミナーの概要

そのようなわけで、出張セミナー実行部隊は、2016年10月15日に日本を発ち、18日までアメリカのペンシルベニア州のピッツバーグ市に滞在しました。日本より一足先に秋が訪れていたピッツバーグは、森に囲まれた自然の多い、とても美しい街でした。かつては工業都市として知られていましたが、今は、ピッツバーグ大学、カーネギー・メロン大学を擁する学術都市であり、スライド左上の写真の高層建築は、2つの大学があるオークランド地区のランドマークにもなっているピッツバーグ大学のメイン校舎「学びの聖堂 (Cathedral of Learning)」という、1934年に建てられたゴシック・リバイバル様式の建物です。中に入るとこのように学生が至るところでノートやモバイルPCを開いて静かに勉強をしており、何とというか、私までも「ちゃんと勉強しないといけないな」と思わせられるような空気がありました。【スライド3】

スライドの写真は、少しだけ時間的余裕があった2日目の16日に、グッド長橋氏の奥様で、やはりピッツバーグ大学図書館の司書をされているグッド和代氏のご案内で、ピッツバーグ郊外にあるフランク・ロイド・ライトの建築を訪ねた際の写真です。この写真を見ながら、今回の出張セミナーの実行部隊のメンバーをご紹介します。まず真ん中の写真は、JALプロジェクト実行委員会事務局長の水谷さん。水谷さんが佇んでいらっしゃるの、(Polymath Park Resort という場所に移築された)ダンカン・ハウス (Duncan House) というフランク・ロイド・ライトが計画したプレハブ住宅の前です。ここには3つの建築が移築されており、ツアーで見学できるようになっていました。また、右上のかの有名な落水荘 (Fallingwater) で記念撮影しているのは、実行委員である東京文化財研究所の山梨絵美子氏、そして私、谷口です。【スライド4】

*たにぐち えり (国立新美術館学芸課美術資料室長)

もちろん、遊びに行ったわけではありません
（笑）視察とセミナーもちゃんと実施しております。

左上の写真は17日のセミナーの前に見学させていただいたピッツバーグ大学のヒルマン・ライブラリー（Hillman Library）の建物で、この中に東アジア図書館（East Asian Library）があります。右上の写真はヒルマン・ライブラリーの特別コレクションの部屋です。また、右下の写真は、ヒルマン・ライブラリーとは別の建物にあるヘンリー・クレイ・フリック美術図書館（The Henry Clay Frick Fine Art Library）です。展示ギャラリーや中庭などもある非常に美しい建物で、閲覧室に入るとこの写真のようにアンティークな印象の開架スペースがあります。

なお、我々が訪問した際、ヒルマン・ライブラリーでは大掛かりな図書の移動がおこなわれており、紙の書籍を大量に外部の倉庫に移し、学生のための研究スペースを拡張するという話でした。グッド氏のご説明によると、現代のアメリカの大学の特に学部生は、オンライン・データベース、電子ジャーナルを使うことが多く、紙媒体の図書はあまり使わなくなっているようで、したがってこのような紙媒体の書物を外に出して学生のための研究スペースを広く取るという形の整備を行うところが増えているという話でした。かなり衝撃的な状況ですね。そのような図書館機能の変質は、日本の現状ではまだまだ考えられない事態ですが、アメリカで起きていることは10年後の日本で起きることだという話もあるので、そのつもりで見とっておくべきだろうと感じました。

【スライド5】

さて、メインの出張セミナーは、2016年10月17日（月）13～16時、実施場所はピッツバーグ大学ヒルマン・ライブラリーの中の研修室のようところで実施しました。講師は、先に述べた水谷さん、山梨さん、そして谷口の3名です。一方、参加者は、司書の方が2名と、日本美術専攻の博士課程の学生が3名の合計5名と、かなり小規模なセミナーです。【スライド6】

最初、水谷さんが、JALプロジェクトの主旨、2014年～16年の3年間の歴史について、このプロジェクトを計画するに至った経緯を含めてご説明されました。このお話を伺って、私自身も、水谷さんにとってのJALプロジェクトがいわば

ライフ・ワークの集大成のようなものなのだという話を改めて知ることができました。それから、山梨絵美子氏が、戦前期の美術研究所時代からの蓄積がある東京文化財研究所の歴史、それから東文研サーチについてのご説明をされました。ご存知の通り、東文研は日本で最も古い美術図書室であり、アーカイブズです。そして私が、国立新美術館美術資料室の活動、特に力を入れている展覧会カタログの収集と発信事業について、また、私自身が日本近代美術史を専門にしているので、その分野の研究者が初動調査に使うツールや、それをどのように使うかという事例をお伝えしました。【スライド7】

3名の話が終わった後、軽い休憩をとり、その後、ディスカッションに入ったのですが、アメリカの博士課程の学生の方々の生の声を聴くことができ、私にとっては非常に貴重な時間となりました。

なお参考までに、3名の博士課程の学生さんたちのご専門は、それぞれ日本美術史の中でもかなりマニアックな分野で、写真一番手前のリー・ジュングエン（Jungeun Lee）さんは足利義教の装飾品などの東山御物の研究、次のキャロライン・ワグーラ（Carolyn Wargula）さんは、昨年のJAL2015の研修生でしたのでご存知の方も多いかと思いますが、繡仏・舍利容器・舍利荘嚴の研究、そしてその次のエリザベス・シェルフ

（Elizabeth Shelf）さんは浅井三姉妹を通して見る近世における女性のアイデンティティと芸術の関係性の研究ということでした。私自身専門が違うため、彼女たちの専門の話を伺ってもなかなかついていけない状況で、アメリカの日本美術史研究の専門分化状況に驚きました。なお、写真の奥に写っているのが、今年度のJALプロジェクトに研修生として参加してくださっている司書のグッド長橋氏です。また、途中退席されたため写真には写っていませんが、もう1名司書のケイト・ジョランソン（Kate Joranson）氏が参加してくださいました。【スライド8】

日本側への要望を踏まえてできることは？

セミナーを終えた後、学生さんたちと指導教授のカレン・ガーハート（Karen Gerhart）先生も合流されて懇親会を兼ねた食事会をしましたが、セミナーと懇親会を通じて学生さんたちから提出された希望を簡単にまとめると次のようなも

のでした。

【作品画像・文献の入手について】

- ・ 高解像度画像をダウンロードしたい
- ・ 展覧会カタログがもっと見たい
- ・ 研究論文をもっとたくさんデジタル化してほしい
- ・ 日本美術の研究情報がマッピングされたポータルがほしい

【言語の問題について】

- ・ 英語の参考文献がほしい
- ・ 美術用語の翻訳支援システムがほしい

まず、美術史の研究に欠かせない作品画像の入手、また研究論文の入手について。JAL2014、2015でも提出されていたおなじみの意見が出ました。

高解像度の作品画像をインターネット上で入手することが難しい状況については、山梨氏より、日本の著作権法の問題だけでなく、たとえ著作権が切れた作品であっても所蔵者である寺社が不特定多数に作品画像を公表することを厭う場合があることなど、日本特有の歴史的経緯に基づいた状況の説明がありました。

また、展覧会カタログの特に新しいものがなかなか閲覧できないという意見については、谷口が、ほとんど灰色文献といっても過言ではない日本の展覧会カタログの特殊な流通のあり方について説明し、国立新美術館が毎年実施している海外拠点機関に対する日本の展覧会カタログ寄贈プロジェクトであるJAC (Japan Art Catalog) プロジェクト¹の紹介と、アメリカの拠点機関の紹介を行いました。皆さん、JACプロジェクトのことをご存じなかったのが、アメリカでの周知がもっと必要だと反省しております。

それから、研究論文のデジタル化に関する要望については後ほど取り上げます。また、インターネット上に点在するさまざまなデータベースを見つけ出すことの難しさの指摘と、そうしたものを見つけやすくする研究ポータルがぜひ欲しいという要望がありました。これについても後ほど触れます。【スライド9】

次に、言語の問題について。ある程度日本語ができる博士課程の学生の方々からの要望だということを考慮すべきですが、英語の参考文献がも

っとほしいということと、それから、美術用語の翻訳支援システム、たとえば東京大学史料編纂所の応答型翻訳支援システム

(<http://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/>) の美術用語版のようなものがあればありがたいという意見がありました。【スライド10】

以上を踏まえて、著作権法の改正などを経なくても比較的早く着手できそうな課題は次のようなものではないかと思えます。

第1の課題は、先に述べた日本美術研究に関するポータルの立ち上げです。ワンストップ型の横断検索システムなどがあれば一番良いのですが、そこまでいかずとも単に必要なデータベースのリンク集でも構わないのではないかと思えます。類似のものは大学の美術史学科のサイトなどにすでにないこともないのですが、それらの問題は長期的なスパンで維持管理がなされにくいという点にあります。作るだけならば比較的楽かもしれませんが、その後、定期的に内容を更新し続けていくのは難しいものです。どの組織が主催するのか、美術館なのか、それともアート・ドキュメンテーション学会や全国美術館会議のような組織なのか、日本を拠点にすべきなのか、それとも海外に拠点を置くべきなのかといった体制面をよく考慮すべきでしょう。

また、こうしたポータルを作るに当たって、日本人が良いと思うものを作るとガラパゴス化してしまいますので、海外の日本美術研究者と協力し、国内外のニーズを反映した方が良いという指摘が、ピッツバーグ大の学生さんたちから出ました。たしかに、私もそうですが、日本で研究をしていると、海外のニーズが見えないことがあります。ピッツバーグ大の博士課程の学生の方々のお話を伺っていると、日本研究の一部として日本美術研究が行われているだけあって、日本で比較的盛んな様式研究や図像研究に基づく作品論のような研究スタイルではなく、美術と社会との接点を射程に入れて最終的にはある時代の日本文化の本質を考察対象としていくような、文化論・文明論的な研究が多い印象でした。そうしたある種大振りなスタイルの研究は、日本国内においては逆に難しいものです。要するに、日本国内で行われる日本美術史研究と、海外で行われる日本美術史研究では、研究のスタンスや目的がかなり異なっている可能性が高い。今回はアメリカでしたが、それ以外の国ではまた、違ったスタイルになる可

能性があります。ですから、ポータルを作る上では、日本在住の日本人研究者と、海外で日本美術を研究している研究者とのスタンスや研究目的の違いのようなものも考慮する必要があり、その意味でも国内の日本人だけで考えない方がよいということが言えるでしょう。

第2の課題は、日本美術および日本研究・日本学を専門とする大学教員や司書に対し、定期的な情報提供をすることです。ピッツバーグ大の学生が一番よく使う日本のデータベースは東京大学の史料編纂所のデータベースということで、話を伺うと、指導教授の先生が一番よく使っているデータベースだから学生さんたちも使うようになったという経緯があるようでした。一方、国文学研究資料館のデジタル・アーカイブなどは存在も知られていませんでした。以上のようなケースから、学生に対する影響力が大きい大学教員や日本研究・日本学の司書に対して定期的に情報を発信することが、一番効率のよい情報提供かもしれないと思った次第です。

そして第3の課題は、大学だけでなく美術館も機関リポジトリを立ち上げた方がよいということです。西洋美術館が今年、国内美術館としては初めて機関リポジトリを構築しましたが、他の美術館も足並みをそろえて、紀要論文などを公開することが良いのではないかと思います。将来的に可能なら、自主企画展のカタログ論文なども公開できると、おそらく学芸員にとってもメリットが大きいように思います。ただ、西洋のオールドマスターを扱うことの多い西洋美術館とは異なり、近現代美術を扱う他の美術館では論文の挿図の著作権問題がどうしても出てきてしまいますが、ピッツバーグ大の学生さんたちに聞くと、たとえ挿図がなくても文章だけでも公開されている方が有り難いとのことでした。

以上が、出張セミナーによって得た具体的な課題です。【スライド 11】

出張セミナーを終えて思うこと

最後に出張セミナーを終えて思うことを述べます。

まずは美術館の資料部門の担当者として思うこと。今回のセミナーのよかった点として、海外の日本美術史専攻の大学院生の研究環境、また、日本美術史の教員・日本学の司書の指導体制を垣間見ることができた点があげられます。時間的に十分とは言い難かったのですが、「百聞は一見に

如かず」です。実際に資料を使って研究が行われている現場に行ってみてはじめて、体感としてわかることは確実にあります。

そして反省点ですが、やはり複数の大学、それもできれば異なる国で、同種の試みを何度か行う必要があると思います。おそらくアメリカの研究環境は世界でも先進的だと思いますので、それだけを基準にしているとサンプルが少なすぎます。また、一応「セミナー」というこちらが教えに行く形をとったのですが、私としてはもう少し情報交換のワークショップのような相互に教え合う対等な形の方が良いのではないかという気がしました。アメリカの日本美術研究専攻の大学院生が、初動調査をどのように行い、どの程度までたどり着けるのか、何が足りないのかという具体的なことが、私にとってはまだ不透明です。ですから、たとえば博士課程の学生と一緒に、彼らの環境を使って、日本美術の特定主題について調査してみて、どのようなところで躓くのかを体験したり、調査のノウハウをお互いに共有したりしてみれば中国美術の特定主題についても同じことを実施し、研究環境を比較してみる。そうした試みによって、何が足りないのかをより具体的に明らかにすることが出来るのではないかという気がしました。 【スライド 12】

次に、私自身は日本美術史の研究者でもありませんので、研究者としての立場から出張セミナーを終えて思うこともありました。

まず、とにかく焦りを感じました。その焦りというのは、日本研究・日本学およびその下にある日本美術研究の空洞化が、かなり深刻なのではないかという点に対するものです。そして、この問題は、コンテンツに関わる問題であるがゆえに、司書などの美術資料を扱う方々だけで解決できるものではなく、コンテンツを作る側の日本美術研究者も一緒に真剣に向き合うべきではないかと思いました。ピッツバーグ大学で伺った話では、同じ東アジア圏の中国、韓国と比べ、日本はデジタル化されたリソースが圧倒的に少ないとのこと。さきほども触れたように、アメリカの学部生レベルでは紙媒体の本よりもデータベースやオンライン・ジャーナルを中心に研究を進める学生が多いため、その環境が整っていない日本研究・日本学分野はどうしても敬遠されるようです。こうした状況を打開するためには、おそらく大学や研究機関がオープンアクセスの紀要論文など

を公表するだけでは十分ではなく、『美術手帖』や『芸術新潮』といった商業雑誌のオンライン・ジャーナル化が進まないとだめなのかもしれません。

私自身は、何でもかんでもデジタル化すればよいというものではないし、そもそもメディア変換不可能なものがあるという前提で研究を続けています。たとえば私の専門の日本近代には、(創作版画誌、前衛美術誌のように) デジタル画像だけでは研究できない資料も少なからずあります。また、昔よりも資料にアクセスすることが楽になったことで却って、誰もがアクセス可能な資料以外の資料を発掘したり、足で稼いで調べたりすることが、より重要な時代になったとも思っています。しかし、今回のセミナーで出会った博士課程レベルの学生ならばともかく、初学者である学部生に対して最初からそのようなレベルを要求していると、日本研究・日本学の領域から別の領域に人材が流出してしまうのだと反省しました。まずは、初学者を学問領域に誘導できる環境づくりが重要なのでしょね。むろん、現状を打開することは、司書や研究者の努力だけでも足りず、商業雑誌なども巻き込んで進めなくてはならない話ですのでそう簡単ではないですが…。

それから、もうひとつは、日本における日本美術や日本文化の研究者たちは「海外発信」ということを盛んに言うのですが、もっと戦略が必要なのではないかということです。「海外発信」は正直なところ、現在、各種助成金が付きやすいです。そのためなのか、「海外発信のための海外発信」ともいべき安直な形骸化した事業も出てきてしまうのですが、誰のために、どんな目的で、どのような方法で発信すべきなのかをもっと見極める必要があるでしょう。先のポータル構築のところでも言いましたが、そのためには国内の研究者だけで考えていてもだめで、グローバルな研究環境において必要とされるものをよく知り、踏まえることが必要です。助成金を取得して自己満足のデータベース、デジタル・アーカイブを作るようなことは即刻やめるべきでしょう。【スライド 13】

最後に

以上が、私が今回のセミナーで感じたことですが、この出張を通じて、お忙しい中でさまざまなアレンジメントをしてくださったグッド氏ご夫妻には本当にお世話になりました。またピッツバ

ーグ大学の日本学研究室の皆様にも、こちらから何か情報提供できたのか怪しいところはありませんが、多大なるご協力を賜りました。この場を借りて心よりお礼を申し上げます。とても有意義な滞在でした。

また、皆様ご清聴ありがとうございました。

¹ 国立新美術館が実施している JAC (Japan Art Catalog) プロジェクトは、海外では入手が非常に困難な日本の展覧会カタログを、海外の日本美術研究の拠点機関に寄贈する事業。1995年、国際交流基金と「アートカタログ・ライブラリー」を運営していた(財)国際文化交流推進協会(ACE ジャパン)の共催事業としてスタートした。その後、2004年10月に、「アートカタログ・ライブラリー」の蔵書とともに、国立新美術館(当時は建設準備室)に引き継がれた。当館が拠点機関に毎年寄贈している展覧会カタログは、各寄贈先の各機関で活用されているだけでなく、オンライン公開カタログやユニオン・カタログに登録され、図書館間相互貸借サービス(ILL)などによって、他の機関でも活用されている。現在の拠点機関は、アメリカ拠点がスミソニアン研究所フリーア美術館図書室、およびコロンビア大学エイヴリー建築・美術図書館、ヨーロッパ拠点がオランダのライデン大学東亜図書館、オセアニア拠点がシドニー大学フィッシャー図書館。

ピッツバーグ大学での JAL出張セミナー開講の試み

国立新美術館
学芸課 美術資料室長
谷口英理



1

JAL出張セミナーの目的

以下に関するケース・スタディとして

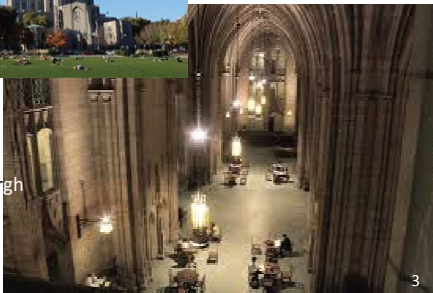
1. JAL2014、2015に提出された意見に対する回答
「日本の実行委員側が海外でセミナーを行うべき」
「日本の実行委員が海外の状況を視察すべき」
2. ポストJALプロジェクトの視座の模索

2

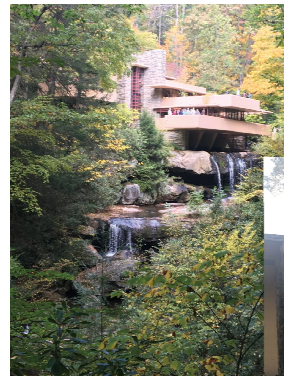


Cathedral of Learning

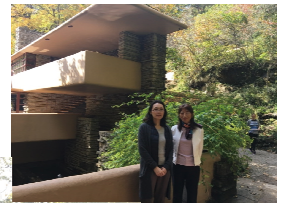
University of Pittsburgh



3



Fallingwater



Duncan House

4



Hillman Library



The Henry Clay Frick Fine Art Library

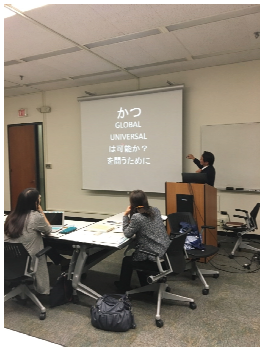


5

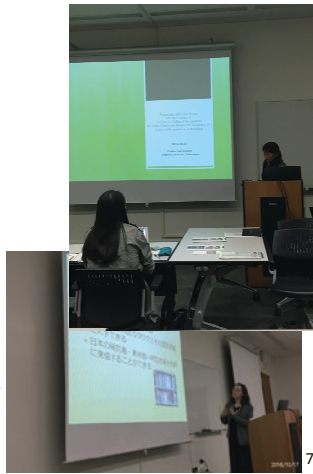
JAL出張セミナー

- ・実施日 : 2016年10月17日(月) 13~16時
- ・実施場所 : ピッツバーグ大学ヒルマン・ライブラリー (Hillman Library)
- ・講師 : 水谷長志 (東京国立近代美術館)
山梨絵美子 (東京文化財研究所)
谷口英理 (国立新美術館)
- ・参加人数 : 5名
(…司書2名、日本学専攻博士課程の学生3名)

6



プレゼンテーションの様様
水谷氏、山梨氏
谷口



7



ディスカッション

8

学生からの要望

作品画像・文献の入手について

- 高解像度画像をダウンロードしたい
- 展覧会カタログがもっと見たい
- 研究論文をもっとデジタル化してほしい
- 日本美術の研究情報がマッピングされたポータルがほしい

言語の問題について

- 英語の参考文献がほしい
- 美術用語の翻訳支援システムがほしい

9



10

比較的早く着手できそうな課題

1. 日本美術研究のポータルの立ち上げ
 - 長期的に維持管理できる体制にする
 - 海外の日本美術研究者と協力し、国内外のニーズを反映する
2. 日本美術および日本学研究を専門とする大学教員、司書に対する定期的な情報提供
3. 美術館出版物のリポジトリの立ち上げ
 - たとえ挿図が見られなくてもないよりはまし

11

出張セミナーを終えて思うこと 資料担当者として

良かった点

- 海外の日本美術史専攻の大学院生の研究環境が垣間見ることができた
- 日本美術史の教員・日本学の司書の指導体制を垣間見ることができた

反省点

- 「セミナー」というより「情報交換ワークショップ」のような形がよいのでは？
- 複数の大学（できれば違う国）で同種の試みを行わなければ、サンプルが少なすぎる。

12

出張セミナーを終えて思うこと2 美術史研究者として

- 日本学・日本美術史研究の空洞化問題に真剣に向き合う必要性
(特に文献のデジタル化が遅れている点)
- 「海外発信」における戦略の必要性
(発信対象・目的・方法を見極める)

13

ご清聴ありがとうございました